

# 清医胡兆新の来日記録と業績

——長崎における一八〇三—一八〇五年の活動(二)

郭 秀 梅

## 一、「問答録」の内容の分析

### 1、医事制度についての問答

唐山医者 of 医事制度・伝授方法・考試科目・必読書などの質問について、胡兆新は以下のような総括的の回答を行った。

「問唐山医士並無考試之例、然雖不考試、而上品業医者皆已儒理通透、而後可以博覽醫書、生心化裁、或已進未進、既可行医治病、仍可儒業考挙、故亦有高発科甲者也。即或医家子弟、亦須通透、然後家学伝業。其有外来不通之医、或外科毒門傷科之類、強記湯頭、粗知藥性則亦指虚道矣、鼓舌搖唇、只不過哄騙鄉愚而已、此等医者在唐山亦復不少耳。考選之制只有太医院供職人家子弟、或已在院習学者、考取補職、外医不能与也。業医之始是必先読『内』『難』經文、『傷寒』『金匱』『脈訣』諸書、或再読『医門法律』名医諸論其余諸家書籍、在其人之好学者、博覧云耳。蓋習医者皆非董稚、毋庸課背也」

この回答から、中国では医師を選ぶ制度が太医院に勤めている人の子供、或いは太医院に就学している者を対象として行われて、民間の医者が試験を受けない事実を知ることができる。それにもかかわらず、上質の民間医も必ず、儒理

に精通し、医書を博覧しなければならぬものであり、医業を行いなから、科挙に当たった人もいる。このような優れた医者と違って、家学もなく、外科、毒傷科流の救医者も少なくないと語っている。胡兆新は民間の医者であるが、学問を学び、基礎理論をかなり重視し、庸医のいい加減なやり方に満足できない人柄であったと推測できる。

一方、同時代の日本の医学試験制度を見ると、医学の考試の最も早いものは寛政改革期、つまり寛政元年（一七八九）に出された医師の勉学督励に関する法令である。実際は、正式に医学考試が行われたのは寛政六年（一七九四）からだと思われる。すなわち、この医学考試は寛政三年（一七九二）に、医学館が幕府の直轄となり、医学館が幕府の医師教育、医師管理の中枢としてなった後、行われたことである。

医学考試に関して、橋本昭彦氏は「当時医学考試の実施に際して、個人の名誉を傷つけることのないように、との指示が幕府あたりから出されていたようにみられる。寛政六年の医学考試は医師としての資格を検定できるだけの厳密さをもつていかなかったことが指摘できる。要するに、寛政期の医学考試において期待されていたことは、医師資格の審査でも、医官の選拔登用でもなく、ひとえに医官に対する修業の督励と検分であつた」と述べている。そうすると、寛政六年（一七九四）から十年後の文化元年（二八〇四）に、胡兆新にこの質問をした者は、おそらく当時の医学考試制度に何らかの疑問を持ち、医師の教育を強化するために、中国の情況を参照しようとしたのだろうか。

## 2、治療についての問答

胡兆新の回答から中日両国では同じ病態に対して異なる治療法が存在したといえる。たとえば、小児誕生の時の断臍後、日本では臍に灸法を施し、また陳艾灰・熊胆汁を臍に塗るが、中国では臍帯が自然に脱落してから、柔らかい綿絹で包む。灸・薬は使用しない。また、日本で行われる痘瘡後に酒湯を浴びる治療法に対して、胡兆新は小児が痘瘡で童子の真気を瀉され、保養しても、護衛しても、またよくいき届かないこともあるのに、どうして酒湯を浴びることに堪

えられようかと反論している。

腹診について、胡兆新は「問唐山診治但有按脈而無按腹之說、況古来亦並無此法。然亦有之、或患腫脹腹滿之症者、視其腹之形色、按其腹之堅軟耳。再或幼科童稚未免傷於食者、故亦按之其他癥瘕痞塊病人自能詳述、亦毋庸按之也」と返答した。この回答に対して、多紀元簡は『医賸』診腹の中で「臨病必診按其腹、詳見於四十九難楊玄操、丁徳用注。此医家四診之外、不可缺之事故也。(中略)蓋此彼邦近代之弊習為然。振不考諸古今医書、漫為之答、亦何陋也<sup>2)</sup>」と不満を示している。

ちなみに、腹診に関する楊玄操・丁徳用の注は四十九難ではなく、四十八難であり、多紀元簡の記憶違いであるが、多紀の質問のポイントは、日本では脈診以外に必ず腹を診るが、中国では脈診しか行わない。別に腹診に関する口訣があるか否かである。しかし、胡氏は腹診が望・聞・問・切の四診に属していないから、診ないのが一般的であるが、絶対にはないわけではなく、病状によつて腹を按ずる場合もあると答えた。この回答に対して、多紀は「胡兆新が古今の医書もよく検討せず、漫然と答えて、何と見識の浅薄なことだろう」と強く非難している。しかし、胡兆新は中国の現状を述べたのであり、腹診を否定したわけではない。多紀氏は腹診を原則とする日本の診療法を強調するあまり、楊玄操・丁徳用が四十九難注で、中国古代に腹診もほかの四診と共に用いるとあるのに固執し、当時の中国で腹診を重視されない事情を理解しようとしなかった。多紀と胡と二人の間に腹診に関する見解の相違があり、互いに納得できなかったのである。

### 3、難治の症例についての問答

俗に早打肩・早手・百日咳などと言われる難治の病症で、中国では「奇方靈劑」を使用するののかとの問いに対して、「肩痛而卒倒致死者、唐山並無此症、或有心腹痛及肩背而昏迷卒死者、病為痧閉、或此類歟」「小兒徒然泄瀉無度、壯熱

大渴、煩悶致死者、或即急驚風之變症乎、原由熱甚化風角弓反張瘳厥症類「幼稚咳嗽不止而成童勞者在処皆有也」と答えている。

つまり、早打肩・早手という病名は、中国のどんな病気に相当するかという質問に、明確に分からないが、類似の病症を挙げて説明した。胡が早打肩を痧閉の同類病症とする回答は、日本人医師鈴木良知の見解によく似ている。<sup>(4)</sup> 胡兆新は早手・百日咳をあまり稀な病気ではないと思っていた。

「奇方靈劑」の問いに対しては、胡兆新は内科方脈は古方・古法のみが重要で、奇方靈劑にとらわれてはならないとたしなめている。

#### 4、風俗風習についての問答

妊娠腹帯と中国南方の治病習慣について質問している。

妊娠腹帯に関しては、「婦人受胎至五月即用兜肚音杜、即腹也。自腕下而少腹、兜裏緊束、約四五寸闊、実非帯。」と回答した。実は、胡兆新は腹帯を中国の兜肚と誤解して日本の妊娠腹帯と解釈したので、回答は妥当ではなかった。

中国南方の治病習慣について質問をしたのが、多紀元簡の『医贖』福医薬案に類似の記載があるから、この質問をしたのが多紀氏であることは間違いない。

腹診・三皇廟の質問と異なつて、胡兆新の返答に対して、多紀は批判していない。多紀はすでに『雲林暇筆』によつて南方医の治病習慣を知っていた。また、かつて中国福州医の薬案二枚を入手していたので、蘇州医の診療後の処方、および薬貼・封筒の様子を図解して見せて欲しいと頼んだ。これに対して、胡兆新は医者が病人の家で診るのは内科だけで、各自それぞれで、定式はない。また、外科・毒門傷科・眼科・喉科などは、医者が「秘方靈薬」を持ってくる場合も多いと答えている。

以上のように「問答録」の質問は簡単かつ現実的で、返答も明瞭簡潔だった。中国医書に記述のない病症治療法にのみ質問の重点があることは、当時の日本の医者はずでに中国医書の記載をよく理解していたことを示す。つまり、医書にない中国の医療状況や実際伝統療法を知りたがったといえる。

ちなみに、この「問答録」には質問者が不明であるが、おそらく幕府の医学館医官であったと考えられる。その中に多紀元簡による質問がいくつかあることは、『医贖』の「三皇廟」「腹診」により明らかである。多紀元簡の『医贖』序の「余辛酉冬、被黜於外班、公事頗閑、然日省病家、不遑寧処」とある。つまり、享和辛酉（一八〇一）冬に待直を免ぜられている。元簡が公的立場で胡兆新と面会する可能性はまずないと思われる。どういう形で胡兆新に質問したのであろうか。それは『医贖』腹診の中の「甲子（文化元年）冬、使訳官問之於蘇門胡振（兆新）」の文からわかる。すなわち、元簡は訳官を介して胡兆新に質問したのである。多紀元簡が一時的に失脚したにもかかわらず、決して幕府医学館の事情に対して無関心であったわけではないこと、その権威も衰えていないことを示している。

胡兆新の返答に多紀元簡が不満ないし非難をしているのは、二者意見が食い違うだけでなく、当時、日本一流の医家が清医の水準に疑念を抱いていたことも考えられる。しかし、長崎で胡兆新の臨床手腕・理論面の知識の評価が高かったので、幕府医官の小川文庵・千賀道栄・吉田長達等は、文化元年の秋に、長崎へ行って胡兆新に学んだ。

## 二、幕府医官の長崎遊学

前述の「問答録」が行われた文化元年、幕府医官の吉田長達・千賀道栄・小川文庵ら幕府医官と後に松平出羽守の侍医になった藍川玄慎<sup>⑦</sup>が七月下旬に江戸を出発、九月上旬に長崎へ到着し、十二月上旬まで胡兆新に学んだ。

『唐人番日記』享和四年二月十九日文化二改元によると、医官達は毎月四と九の日に唐館を訪ね、胡兆新と問答した。勿論、この問答が筆談、あるいは唐通詞の通訳を介して行われた。しかも、毎月二と七の日、崇福寺、聖福寺に

出掛けて胡兆新の診療に同席した。その時の問答が「筆語」と題した記録として編集されている。医官達の長崎遊学に對して、浅田宗伯は「三人が胡振に付いて医学を学び、理論・治療面で実績をつみ、その後、たいへんな名医になり、たくさん病人が治療を求めてきて評判となった」と記している。<sup>8)</sup>

### 三、「筆語」(清医の記録)の成立

現在、わかっているに限りにおいて、「筆語」は『胡氏筆語』(外題は崎館箋臆)と『清客筆語』の二種写本が存在している。

①『胡氏筆語』(外題は崎館箋臆、以下「筆語1」と略する)

本書の表紙には、富士川游の筆によって「文化元年胡兆新長崎ニ来ル、幕府医官小川文庵(龍仙院法印)等往テ兆新ニ接シテ医事シ問ス 此書ハ則チソノ時ノ記事ニシテ、小川文庵子ノ自ラ筆スル所、崎館箋臆ノ稿本ナリ」と「筆語」の成立の由来を記した紙片がついている。

二頁目に胡兆新自筆の解題がある。それは「僕三人発江戸時秋仲也、季秋而到于崎而与清客筆語数回而未有一善也、万羸之宝不如一絳、雖然此萃也、一片南鐮優數卷可発一笑一笑。蘇門胡兆新題」とある。この解題は、幕府医官三人らに頼まれた胡兆新が半ば冗談に書いた文章である可能性がある。

次に医官達と胡兆新の問答内容の記録が続く。

卷末に甲子(一八〇四)立冬後一日に大田覃(南畝、蜀山人)が「頃年有胡兆新、名振者、受業于太医院何鉄山。附載賈舶寓于崎館、毎月六次出遊崇福聖福二寺、間有乞薬者、創意授方往々有効。云東都医官小川文庵・吉田長達・千賀道栄三君請官告暇将問其道、以試吾技。甲子秋附崎尹来、数至客館与二寺問難、往復始为一書。立冬後一日江戸大田覃」の跋文がつく。この跋文によると、胡兆新が毎月六回崇福寺、聖福寺で病人を診療したが、かなりの効果をあげたとある。

また、この跋文から幕府医官の小川文庵、吉田長達、千賀道栄の三人が甲子秋に長崎に到着、客館及び崇福寺、聖福寺に胡兆新を訪ねて、行った医学問答が、本書であることが分る。

②『清客筆語』(以下「筆語2」と略する)

本書は、⑥『栗園叢書』胡兆新御答書和解と吉田菊潭筆語及び「筆語1」から構成されるものである。第一頁に吉田長達による次の奥書がある。

「文化元年甲子清医胡振来於崎陽、官命施治而頗有驗、秋七月祥告官乞暇與小川文庵実、千賀道栄輯、同至崎陽客館、止百有余日、与振応酬問難、逐録為冊、名曰清客筆語。菊潭吉田祥仲禎識」

次に吉田と胡兆新の間での自己紹介がある。

「僕姓源氏吉田、名祥、字仲禎、号菊潭、又号長達、江戸医官也、時年二十有五。僕姓胡、字兆新、号星池、又号侶鷗、蘇州人、時年五十有九」

それに続いて問答の内容を記す。

最後に「得諸池田先生、仍請恩借謄写本有清客謹覆一卷、吉菊潭筆語一卷、千賀・小川・藍川三子所録『崎館賤臆』一卷、今併為一云。時文化五年歲次戊辰秋八月觀濤日、柳園正衡誌」と記す。つまり、この写本が文化五年に柳園正衡氏が池田先生から⑥『栗園叢書』胡兆新御答書和解と吉田菊潭筆語の二巻とともに借りて写し、編集したものである経緯を述べている。

#### 四、「筆語」の内容

「筆語1」は「筆語2」とほぼ同じ内容だが、「筆語1」では、官医らの質問が任意に混ざるが、「筆語2」では、四人の質問が一人ずつにまとめられている。最初に吉田菊潭氏と胡兆新の筆談、次に千賀道栄・小川文庵・藍川文慎の順で

書かれている。そして、十一月二十七日付の吉田菊潭と胡兆新の文通を取めているが、これは「筆語1」にない。「筆語2」は前半と後半に分かれる。

前半には九月十九日の日付と、二十四日の日付があり、吉田長達、藍川玄慎、千賀道栄、小川文庵の質問と、それに対する胡兆新の回答の記録がある。後半には前述した胡兆新が治療した四病例を記録があるが、完結していない。

「筆語2」の質問内容は上述の「問答録」と大体同じで、基礎理論、臨床各科、針灸、本草、方剂、葉量、葉具、字義、風俗などいろいろな医学問題に及んでいる。幕府医官達が日常、難解な問題、難しい病例、あるいは興味がある医事などについて胡兆新に質問した。これらに対する胡兆新の返答は、それぞれ素朴であるが、的確に応答している。胡兆新は蘇州呉県の民間医で、古典の解釈より、臨床に長じていた。なぜなら、臨床の質問に関して納得いく回答しているが、医学文献と考証学など問題には十分に答えていないし、又は、自ら分からないと正直に答えている場面もある。

例えば、「筆語」の九月十九日に吉田長達、藍川玄慎が行った初生小兒斷臍法、小兒齒病に関する質問に対して、それは穩婆と幼科医の仕事で、僕は詳しく分からないと胡兆新は回答した。

胡兆新が医官達と筆談だけではなく、聖福寺、崇福寺で病人を一緒に診ながら、脈学などの検討している。胡兆新の脈学に関する回答に、医官達は深く感心した。例えば、「筆語」の九月二十四日に、小川文庵は「往日于崇福寺示実輩脈象多謝多謝。古人説脈各懷己見、紛紛無定、実不才、至洪大軟弱牢革弦緊之類甚難知覚、雖指下之玄理心之所得、先生陳各脈象形、以示梗概、何幸加之」と質問した。胡兆新はこれに対して、「按脈弁脈全在心領心会、不可言語形容也。総在熟説脈訣、脈証相參、臨診千万、乃能心領神会也、一時何能詳述」と經驗の重要性を説いた。

筆談の機会に、医官達は自分の患者で難治の病例について胡兆新に教えを受けた。ある日、小川文庵が婦人腹証の症状および治療方法を胡兆新に問うたのに対して、胡兆新は病状を根気よく質問したうえで、病機、病理について分析し、自分の見解を示した。



しかし、「筆語」の二十四日の記事によると、胡兆新を不快にさせたこともあった。それは千賀道栄が『黴瘡秘録』の陽城罐・『明史』の縊死や『十便良方』の傷風吹襲などについて質問したのに、回答に困っていた。胡兆新は幼時から儒学を学び、医学は名医から伝授された、正統な理論を重視する民間医であったが、民間の治療方法には注意を払わなかった。それで、これらの質問は胡兆新を辟易させ、やや嫌がらせたようである。千賀道栄は陽城罐についての質問が胡兆新を窮地に追い込んだことに気づいて、更に問いつめることを遠慮している。

この日の筆語が終わったときに、胡兆新が医官達に「読書というのは食物を取るように、精微を取り、糟粕を捨てなければいけない」という文章を出して、諸医官の糟粕に拘った質問するのは意味がなく、無駄なことだとたしなめた。諸医官は胡兆新の不機嫌に気付いて帰った。後日、医官達は聖福寺を出るときに一文を胡兆新に渡した。文中に、前日の教示に感謝の意を表し、われわれは山海を越える艱難の旅に耐えて、長崎にきた目的は、医学の精緻を極めるためだと誠意を表した。胡兆新は「読書は『靈』『素』から始めて、『傷寒論』『金匱』、次に金元四家などを読んでいくが、諸家学説の中の無意義な内容を吸収してはいけない」などと訓諭している。

「筆語？」の十一月二十七日付、吉田菊潭より胡兆新あての手紙、及び胡兆新の返事がある。

主な内容は十一月頃、吉田氏が瘡にかかり、暫く休んで、胡兆新と会えなかったときに日中医師の学問を研究する方法について手紙を書いて、胡兆新に尋ねた。

二人の手紙は、当時の中日両国学者においてみられた学術の相違点ならびに医学状況を示している。

周知のごとく、多紀家の私財で造営された躋寿館は、寛政三年（一七九二）十月二十四日に官立に移管して、名を医学館と改め、江戸中後期の医学教育、校刻事業を主宰し、優れた医者を養成し、江戸時代の医学発展に貢献した。胡兆新が来日した時期は、まさに医学館を中心とした考証学派の活躍により古典籍の研究は頂点に達して、古典を基本とする漢方の基礎学問を打ち立てていた時期になる。特に幕府医官達が医学館で研修に精励し、主に中国古典の翻刻、考証学

など面にすばらしい業績を残していた。

幕府医官吉田長達が二十五歳の若さで、古籍を熟知し、学問に勤勉であるのは、その時の事情を反映している。胡兆新はその学問に感銘し、自ら、本国の医者達が、日本学者の学問の広さ、深さに比べて劣ることに恥じている。日本の制度、学校の設立及び、医学教育制度に対してうらやむ心境を述べた。

ところで、当時最高医学教育を受け、豊富な古典籍に囲まれた環境の中で育まれた幕府医官の吉田氏に対して、地方の民間医胡兆新は、学問上の伝承を受けていたが、近い時代の医籍や学説を重視し、臨床により力を注いでいた。それだからこそ、日本の医師にとって清医が来日して中国の現状を語ることは意義があつたのである。

「問答録」と「筆語」を比べてみると、両者の異なるところは「問答録」が単なる紙面による問答で、微妙なところがあまりないが、「筆語」には、親しく対面した交流の様子が生き生きと現れている。また、年少の医官達からは、胡兆新に学ぶことに堅い決意と知識を強く求める情熱が伝わってくる。時には難問ともいえる質問をなしたが、あえて困惑させようとしたからではない。同じことは『胡氏方案』における原春の胡兆新へ手紙にも見られる。自らは常に胡氏について習いたいのが、官府の制限があるので、不可能である。故に、聞きたい問題を執拗に尋ねた。この得がたい機会をなるべく有効に利用して、知りたいことを胡兆新に教わりたかっただけである。同時に、胡兆新の不得意な問題では問いつめることを避けて、胡兆新への敬意もはらっていた。これは「問答録」の質問者が清医に多少疑いを抱いていたのと違ふところである。

##### 五、『大田南畝全集』にみる胡兆新の記事

胡兆新の医療は当時の奉行および医師に重視された。特に、同じ頃（文化元年一八〇四年九月十日から翌年十月十日）に長崎奉行所の支配勘定役として一年間在勤した幕臣の大田南畝が胡兆新について記述を残している。これからも胡兆新

婦人産後小便頻數既而淋瀝流痛雖是  
 膀胱之氣有所窒塞並或血去陰虛奇經  
 傷損任督之脈不為順利於下耳蓋奇經  
 八脈皆附於肝腎女子以肝為先天其脈  
 循行腰脇環繞少腹所以或時疝痛甚  
 至陽微為痛病寒熱作矣幸賴後天脾  
 胃運化之源不絕乃得延候如常此  
 飛度髮之落久、延候終防損性之慮為  
 今調治之策或可展陰通補培其三陰調  
 其八脈如丹溪大補陰丸加琥珀末或更  
 肉桂与滋腎合注為涼補之劑以伸景腎氣  
 圓左歸丸為鹿膏以溫表下元俾得  
 肝腎氣充則膀胱之氣亦可暢通流利  
 但病延七載久而沉痾恐難奏效也

蘇門胡也新謹復

胡兆新

図1 松平伊織奥方の容体書

の事跡を窺い知ることができ。これはまた胡兆新の活動を確認するためにかげがえのない資料でもある。

胡兆新の治療に関する記録が、大田南畝の文化元年（一八〇四）江戸にあてた手紙に見られる。『蜀山人尺牘』十月十日、「瓊浦雜談」によると、日本の医師が葉箱を持って病人を診察するのに対し、中国の医者には処方だけを扱う点が違う。長年の診療をしても、薬味について無知である胡兆新を感心させている。また、胡兆新の治療薬方を奥原重蔵が七

冊に整理、その中にいい処方があることが分かったとあるが、現在、この処方集の所在は不明である。

大田南畝は胡兆新について江戸へしばしば報告していた。しかし、二人が親しく交流したか否かを確かめる資料は見当たらない。だが、二人は会っている。大田南畝の『瓊浦雜綴』の記載によると、文化二年（一八〇五）二月二日の唐館做戯で、二人は顔を合わせている。

#### 六、手紙による難病についての質問

胡兆新は毎月聖福寺、崇福寺に六日間出掛けるけれども、直接受診できない患者がやはり少なくない。胡兆新の名を慕って長患いの病人が治療を求めた場合は医官を介したり、手紙で尋ねた例があった。

「松平伊織奥方の容体書」<sup>14</sup>は松平伊織夫人の病気を胡兆新に伺う手紙と、それに対する胡兆新の自筆返書である。（図1）

手紙の要旨は、松平奥方が七年前から産後の小便淋瀝病を病み、多数の医師の治療を受け、種々薬方を試みたが、効き目がなく、そこで

胡兆新に尋ねた。この病気の病機に対して、日本の医者では敗血が凝聚し、或いは氣道が壅塞し、或いは肝血が不足し、或いは癥瘕と診断し処方したが、効果がなかった。胡兆新は婦人病の多く奇経八脈にかかわり、膀胱の氣が阻滯するだけではなく、肝腎も損なうが、後天の脾胃がまた元氣なので、原則として三陰を培い、八脈を調節する方法を用い、処方の方が名方の大補陰丸、腎氣円、左帰丸、亀鹿膏などを挙げたうえで、この病氣は多年に遷延したので、治りにくいと正直に告げていた。要するに、前の医者が一般的に氣血、臟腑の辨証を主として、経絡の理論にまったく触れていない。それに対して胡兆新が婦人の生理特殊性をもつて、奇経八脈に着目した。それは胡兆新と日本の医師の考え方の違いを示している。

## 七、交遊と詩文・書・心境

### 1. 交遊

胡兆新は滞日中、医官の小川文庵たちと常に交流をもった。長崎に在勤中（長崎奉行出役）の大田南畝の病氣に治療にあたった医者が、前述の手紙にもみえる小川文庵であった。大田南畝の往診に、胡兆新ほか清人の情報を数多くもたらしたことは、南畝の著作から分かる。また、『窓の鎖国』には「程赤城（在留唐人の間に和歌俳諧に精通）は同時代長崎に於いて唐人医として有名であった胡兆新と懇意な間柄であり、また江戸大田蜀山人とも相当親交があったらしい」とある。

そのほか、後述のように、文化元年、聖福寺の第九代竜門雷大和尚が聖福寺主方丈となった時、胡兆新が賀章を作ったことがあった。また、著名の書家市河米菴と筆の剛柔について問答したこともあった。さらに薬品との関係で中村の家をよく訪ねたことを『長崎談叢』<sup>16)</sup>に記している。

胡兆新は滞日中に医師として医事活動を主としたが、患者や医師以外にも様々な人物と交流し、文学方面にも多大な

影響を与えた。胡兆新の長崎での行動は例外的にかなり自由だったらしい。これは彼の医術・才能・人柄が評価を受けたためではないだろうか。

## 2. 詩文

詩が友人との出会いをとりもつことが、当時の文化人の間では常習であった。胡兆新は詩文・書道に長じ、友人に巡り会う機会がかなり多かったと考えられる。胡兆新が長崎に滞在中に作った詩文は、『百舌の草茎』『蜀山人尺牘』『瓊浦雜綴』『瓊浦又綴』に採録されている。

胡兆新の詩文からは、胡兆新その人の性格、および長崎にいた時の心境を推測できる。大田南畝は『百舌の草茎』<sup>17)</sup>で、胡兆新の七言律詩を評して「不満の気甚し。想ふに落第の書生、医に逃れたるべし」と推測している。<sup>18)</sup>

『蜀山人尺牘』<sup>19)</sup>の二首五言詩には胡兆新の故郷を憶う気持ちが表示されている。来日一年を経ずして、故郷の児女が毎晩、夢に現われるようにと思念している。また、帰国の際の大田南畝にあてた詩文には、長崎の官府に感謝の意を表すことが常識であるにもかかわらず、抑えられない苦悶の心情が溢れている。更に、「人は説う洋中好しと、我も亦輕遊を試む」の詩意からは、この度の旅を悔いていたことが推測できる。

『瓊浦又綴』<sup>20)</sup>には聖福寺の主办方に賀章がある。「我崎陽に到りしより、一載頻り登臨する」の詩文は自らが診療のために聖福寺へ頻りに出掛けていることを語ったのだろうか。

ところで、胡兆新の詩文には酒に一言も触れていない。胡兆新は酒を飲まなかった可能性が大きい。そのせいか性格は豪放ではなかったと推測する。

## 3. 書

『蜀山人尺牘』<sup>(21)</sup>など資料によって大田南畝をはじめ、長崎にいる文化人は胡兆新の書に感嘆し、時々胡兆新に揮毫を依頼したり、学んでいたことがわかった。

『手紙雑誌』<sup>(22)</sup>には市川米庵より、その交友林某に与えた手紙も収めている。その文末に米庵が遊崎中、胡兆新と筆談した内容がある。

『米菴墨談』<sup>(23)</sup>巻一・巻二に書法・真跡・筆剛柔などについて、胡兆新へ教えを請うたとを記している。市河米庵は書家としても名があり、米元章を専ら習ったといわれるが、来船清人の胡兆新からも影響を受けている。

『瓊浦雜綴』<sup>(24)</sup>によると、長崎奉行の成瀬因州は大坂にある先祖の一斎君の墓に、胡兆新が書いた字を刻している。『五山堂詩話』の「伊沢蘭軒」<sup>(25)</sup>に胡兆新に関する記述がある。次の通りである。

胡振、字は兆新、号は星池である。医にして書を善くした。江戸の人秦星池は胡の書法を伝えて名を成したのだと次のように記している。「星池秦其馨、書法遵逸、名声日興、旧嘗遊崎陽、私淑呉人胡新、遂能伝其訣、独喜使羊毫筆」。さらに秦星池『和漢对照書札』の附録・星池秦先生書目<sup>(26)</sup>に「十三跋蘭亭帖 嗣刻 墨本原本快雪堂法帖臨胡兆新先生書」「臨清人胡兆新先生山静帖 続刻 墨帖」とある。このように、秦星池は江戸から長崎に遊学したとき、胡兆新の書を独学し、その書法でのち名声を博したのである。彼が胡兆新の号の星池を自ら用いたことに、その私淑ぶりが窺えよう。

なお、『杏林叢書』所収の『蘭軒医談』<sup>(27)</sup>には「文化の初め長崎に赴き居ること一年、清客程赤城・胡兆新等と風流文字の交をなす」とあるが、この事は不可能である。というのも伊沢蘭軒が長崎に滞在したのは文化三年から文化四年までであり、その時胡兆新はすでに帰国している。蘭軒が胡兆新と直接出会うことは不可能だが、程赤城と会ったのは間違いない。

『長崎古今学芸書画博覧』<sup>(29)</sup>に「胡毛新、享和三年（一八〇三）来る、儒医兼通、文墨の士と交わる」とあるが、胡毛新は胡兆新の誤りである。

#### 4. 心境

胡兆新は最初から滞在期間は定めなかったが、彼の活躍及び受けた評価から考えると、もっと長く滞在してもよかったのではないかと想像する。しかし一年半で帰国した。これは当時、連れ渡った船頭が帰帆する時まで滞留するという原則があつたので、彼の帰国がその商船の帰帆に合わせたまでのことである。一方、前述したように、幕府医官達の質問に辟易し、日本医師の細緻、高水準に感心すると共に、自国医師の勉強の不足の恥ずかしさで、胡兆新が複雑な心境にあつたことが推測できる。また、自作の詩文「客夢家を離れず」「北海は人情異なり」「故園兒女在りて」「回憶の想に堪えず」「郷思満腔の愁い」から彼の心境を窺い知ることができる。異国の地における彼の望郷の念、および不快の心情、人情と世故に不適のことが切実に伝わってくる。要するに、一年半の長崎の滞在中、胡兆新の心情は必ずしも快かつたといえない。これは彼の性格と来日の動機が同郷の友人に誘われたことで軽い気持ちで来日したからであつたかもしれないが、また一面では、胡兆新の従順で素朴な人柄が裏付けられるものである。

#### 八、事跡年表

現存の資料によって、胡兆新が長崎滞在期間の活動をまとめて以下の年表にまとめた。

##### 胡兆新年表（長崎逗留期間）

年 号 西 暦 事 跡

享和三（一八〇三） 十二月、子二番船で来日する。

享和三 (一八〇四)

二月七日、毎月二と七の日に崇福寺と聖福寺で病人を治療することが決まり、二月十二日から診療を行い、真野三圭・西原長允が時々治療の日は出掛けて同席している。

文化元 (一八〇四)

二月十九日に改元

五月、江戸から来た医官たちの質問に応じ、胡兆新との応答が記録された。秋七月下旬に幕府医師の吉田長達・千賀道栄・小川文庵および松平出羽守の侍医の藍川玄慎達が江戸を立ち、九月上旬に長崎へ着き、十二月上旬までの間に、毎月の四と九日に唐館に入り、胡兆新と問答し、そして、崇福寺、聖福寺での治療の日は出掛けて同席している。八月七日、聖福寺の第九代竜門雷大和尚のために賀章を書く。九月六日幕府医師達が唐館に入り、十九、二十四日、医師四人が胡兆新と筆談を始めた。二十四日の筆談の中に、ややこしい質問で胡兆新を不愉快にさせた。立冬後一日、大田南畝が『崎館箋臆』の跋文を書く。十一月廿七日、吉田長達と書簡の往来がある。十二月朔日、林祭酒の撰した大坂の陣時の成瀬因幡守の先祖の一斎君の墓の碑文を胡兆新が書す。千賀道栄は十二月十一日出立、正月二日浪花。小川文庵・吉田長達は十二月廿六日出立、正月廿日頃浪花にあり。

中村嘉右衛門が所蔵する森狙仙が描いた猿の図に詩を題す。  
米菴と「論筆剛柔」について筆談する。

文化二 (一八〇五)

二月二日、唐館做戯に出席し、大田南畝も招待される。

二月藍川玄慎帰国。

四月子九番船で胡兆新帰国。



## 九、まとめ

これまで明らかにしたように、胡兆新の長崎における医療は日本でかなりの評価を受けた。当初、幕府は胡兆新の活動を唐館商人の治療に限定し、現地の医師と接触することに慎重だった。しかし、実際には、来日して間もない文化元年（一八〇四）二月から、聖福寺と崇福寺で日本人の治療を始めている。同年五月には、江戸から来た医官たちの質問に応じ、胡兆新との応答が編集された。その一つが同年秋以降に行われた幕府医官の吉田長達・千賀道栄・小川文庵ら及び松平出羽守の侍医藍川玄慎との問答で、それは「筆談」と題してまとめられた。

また、大田南畝は文化二年『医林蒙求』の序に、「清医胡兆新者来于崎陽、視病授方名噪一時」と優れた名医だったと記している。

古賀穀堂は『穀堂遺稿抄』の巻一にも「寄清医胡兆新」と題し、「濟世神功藥一囊、異人忽爾到扶桑、旭輪跳海紅霞湧、鯨背摩船黒浪揚、漢館月明莊賦就、越天雲起烏吟長、近聞崎港人相慶、妙訣誰伝肘後方」と胡兆新を高く評価した漢詩を詠んでいる。

このように胡兆新はわずか一年半余りの間に清時代の医療及び医術の伝播に多くの業績を残した。本論文ではこれまでに注目されなかった胡兆新の事跡とそれに対する日本側の対応ならびに影響を明らかにした。これによって江戸後期における中日医学交流の特質の一端が明らかになった。さらに、彼の来日前後に来日した人物とその周辺を調査、検討することで、日中医学交流史の性格をさらに鮮明にすることが期待されるが、胡兆新の研究はその起点となるものである。

## 謝 辞

拙稿の作成にあつて元国文学研究資料館の歌野博氏、北里研究所東洋医学研究所医史学研究部の町泉寿郎研究員、小

曾戸洋部長、茨城大学人文学部の真柳誠教授、順天堂大学医学部医史学研究室の酒井シヅ教授から資料の調査、古文の解説、論文の指導など種々の御教示を戴いた。ここに心から感謝申し上げます。

### 注と文献

- (1) 橋本昭彦『江戸幕府試験制度史の研究』、二三〇～二四五頁、風間書房、東京、一九九三。
- (2) 前掲文献(34) 一一九頁。
- (3) 『難経集注』、六八、六九頁、人民衛生出版社、北京、一九五六。
- (4) 鈴木良知『医海蠡測』、三六七、三六八頁、影印天保五年(一八三四)刻本、北里大学白金図書館所蔵。  
「青筋・素行按：豆咬即是痧病、以其身上見青筋一条、故名之為青筋也、最為急卒之病、故関以東之人呼為早打肩、言以刀子早打肩上、取出惡血即愈也」
- (5) 前掲文献(41) 一一〇、一一二頁。
- (6) 中村久四郎「近世支那の日本文化に及ぼしたる勢力影響」第六回、『史学雑誌』第二十五編第十号、一二二四頁、一九一四発行。『時還読我書』の著者たる多紀菫庭は同書巻一に「蓋清人の治術は一味配剤にて、迂緩泛雑なること、其弊日に甚しと見えたり。古方を運用する人は絶えてこれなきに似たり。亦怪訝すべき事ならずや」と当時一流の医家の清医に対する非難不足の一声として聞くべきものなり。又菫庭の父多紀桂山も其『医賸』巻中に記して曰く「近聞吳中医士、寓於崎巒者、独診脈而不及腹。予心訝之。甲子冬、使訳官問之於蘇門胡振。振覆曰、唐山診治、但有按脉、而無按腹之説。云云。蓋彼邦近代之弊習為然。振不考諸古今医書、漫為之答、亦何陋也。」この桂山の清医非難の言に至りては、更に有理の言ふべし。
- (7) 森立之『枳園隨筆先哲美談 二』自筆稿本、四七頁、大槻文彦旧藏書、明治十二年成、青裳堂書店影印、東京、一九九七。
- (8) 『事実文編』第四冊、四二四～四二六頁、早川純三郎発行、東京、一九一一。征府侍医小川先生碑―浅田惟常「征侍医小川先生碑昔征府之盛、經文緯武、其政施及元元、以濟生為念、下令長崎鎮台曰、有清医足資者、宜致之、於是蘇州胡振来、乃使医官子弟三人就学焉。読傷寒論十卷、又注老子、後奉命赴崎巒、与胡振論醫、極理療之蘊、於是名声大震、請治者履常滿門。弘化二年以傷寒貫珠集版納於医覺、此書在長崎日聞之於胡氏、令訳官陳惟賢模之、以刻於家、本邦有尤在涇傷寒之書是為始」

- (9) 『京都帝国大学和漢図書分類目録』第四冊・医学、二四六頁、富士川本目録キ・九、京都帝国大学附属図書館、京都、一九四二。
- (10) 『胡氏方案』、原春による写本五冊、原春の文化甲子冬日に書いた奥書がある、松江日赤病院附属図書館、架号・四十五。
- (11) 『蜀山人尺牘』四三二〜四三九頁。十月十六日「此度参り居候唐医胡兆新え相談いたさせ候処、別紙之通薬方書付くれ申候、めづらしきもの故胡兆新直筆のまま進上いたし候間御蔵し置可被成候、よくよく医者之文盲でなき男に御見せ被成御用ひ被成候て可然候、文庵子はよろしくかるべきと申候、一体和らかなる療治ゆへよろしく候、二七の日は長崎崇福寺え出て、日本人之療治いたし、右療治請候に薬をもち候事無之、此別紙之通り薬方を書あたへ申候、是唐にての療治は皆々如此の事の由、日本医者之薬箱の便利なるを見て感心いたし候由に候、此胡兆新療治之薬方七冊もはや奥原重蔵に写させ申候、余程奇方有之由に候」
- (12) 『瓊浦雜綴』四三二〜四三九頁。「唐山には切艾なし艾を丸めて灸とす、胡兆新いへるよし、小川文庵の話、二月二十日」
- (13) 『大田南畝全集』巻八、「瓊浦雜綴」、六八八頁、吉川弘文館、東京、一九〇八。
- (14) 「松平伊織奥方の容体書」最近、発現した資料、北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究所に所蔵。
- (15) 増田良吉『窓の鎖国』、八三頁、朝日新聞社発行、長崎、一九四三。
- (16) 林源吉「畫人狙仙と噂の多良岳」『長崎談叢』第十九輯、三八〜三九頁、藤木博英社、長崎、一九三八。「狙仙はこの中村家と關係を有し同家で描いた猿の図に清国人胡兆新は絶壑深蔵境自幽、逍遙携子任遨遊。夜深莫向山啼月、感動人懷無恨愁。と贊をした。唐館御出入の中村家は別けて薬品貿易が盛であつた關係から胡兆新は屢々同家を訪ねた。(中略)胡兆新が狙仙の画に題したのは甲子の歳にて即ち文化元年、作品は巾一尺三寸長三尺五寸彩色密画の絹本にて中村家の後裔蒲地信氏が現在秘蔵されている」
- (17) 大田南畝『百舌の草茎』、五五十頁、吉川弘文館、東京、一九〇八。九月十七日「我学空門並学仙、朝看紅日暮蒼煙。蓬萊一別方平老、不及王喬正少年。癸亥冬日為如登先生正、胡兆新」
- (18) 『大田南畝全集』巻八、「瓊浦雜綴」、五八八頁、吉川弘文館、東京、一九〇八。
- (19) 『蜀山人尺牘』巻五、「瓊浦又綴」、二二〇頁、「文化二年二月十五日・甲子初秋於崎陽旅館雨後聞蟬有感之作」一雨生涼思、

羈人感歲華。蟬声初到樹、客夢不離家。海北人情異、江南去路賒。故園兒女在、夜夜卜灯花。蘇門胡兆新  
 人說洋中好、我亦試輕游。掛帆初意穩、風急繁心憂。漸漸離山遠、滔滔逐浪流。不堪回憶想、鄉思滿腔愁。在乍揚帆離山試筆  
 為南畝先生雅正 蘇門胡兆新

(20) 『瓊浦又綴』二二十頁「文化元年聖福寺主方丈となりし時・賀章」聖福古叢林、巍巍聳百尋。我自到崎陽、一載頻登臨。未  
 訪赤松子、先探白雲岑。寺中老比丘、超凡入慧心。道高千偈捷、水滴一投針。說法天花散、行吟仏語源。久宜尊上坐、瞻礼遐  
 迷欽。小詩不足賀、鄙俚汚梵音。時在甲子小春書奉竜門大和尚隆坐之喜即請法鑑一蘇門胡兆新拜稿

(21) 『蜀山人尺牘』四四二頁、十二月十六日「当年入津唐人頭立候もの計名前別紙入御覧候、此中に九番船江泰交と申もの書画  
 宜候由に付絹地遣し置候、医胡兆新書も宜候間、是亦絹地遣し置候、何にても亦々御好みの詩歟文字等候ば書せ遣し可申候、  
 李白題詩水西寺の詩も頼み置候」

『同書』二月二十五日「胡兆新も当春は帰国故絹地二三枚かかせ候処、ことの外見事に候、江泰交も画を書かせ、山水画帖に  
 入れ申候、時々展覧いたし候」

(22) 『名家書簡資料集』第六卷、「手紙雜誌」第四卷、第五号、二二一頁、株式会社ゆまに書房、東京、一九八七。「四月廿又五  
 林交契二白、過日御属之胡兆新筆語数十枚之内、一枚相附上、筆談とてさしてむつかしき事も無之候。足下御在崎中、渡来之  
 舶商と御筆談可有之候。江之関余荷舟など居合候へば、せめてもの事に候。僕西遊之日、兆新僅々一年有余之在館に相会し、  
 実に奇遇と奉存候。伊孚九などより書風下候得共、江餘に比すれば一著高く相覚候。去今十五年、憶旧夢中事也」

「僕有臨池之癖、近見先生之書、用筆不凡、自今欲従事于先生、伏請筆授。河三亥  
 僕愧書法不工、何敢従事之稱、尚須請教、尊書高妙入神、指教為幸。胡兆新」

(23) 『日本書論集成』第二卷「米菴墨談」、三〇頁、汲古書院、東京、一九七八。

卷二・サキニ長崎ニ遊シトキ舶医胡兆新ニ書法ヲ問シニ又多ク古人ノ真蹟ヲ見ルニアリト答ヘリ然レモ身万里ノ外ニアリテ  
 名人ノ真蹟ニ遭ニ事実ニ至難ノ事ナリ

卷二・論筆剛柔「曩ニ余崎港ニテ胡兆新ニ羊毫ノ用法ヲ問ヒシニ、其答ニ云先ツ一寸ノ筆頭ナレハ、七八分モヲロシ墨水ヲ能  
 ク含濡シ、正鋒懸腕ニテ徐ニ書スレハ墨水筆ノ運動ニ随ヒ、自然ト紙ニ透徹シ宛転トソ態度ヲナシ温籍ノ妙墨水ノ和ヲ得テ生

ス、凡大小筆モ皆カクノ如ク、深クヲロスヘシト云リ、爾後此法ヲ以テ書スルニ墨痕沈着シテ、言外ノ趣マルヲ覺マ然モ懸腕書ヲ能ヤサル人ハ羊毫ヲ用マル事アタハス此中ノ旨趣共ニ語ルヘカラス余マタ兆新カ此方ノ状書筆ニテ書スルヲ見テ疑問ヲ發セシニ兆新云：コレ佳筆ニアラス但深クヲロストキハ柔毛ニメ書シヤスミ、惜ラクハ筆頭中ニカタキモノワリト云リ、余マタ思フニ唐筆ハ墨ヲタモチヤスク、和筆ハ墨ヲタモチカタンシ大抵唐毫ハ頭根瘦テ、中肥タリ、和毫ハ根ヨリ頭ニ至マテ次第ニ瘦テ細シ、コレ自然ト彼是ノ違ヒナリ余カ筆ニ生花堂兄弟トモニ制筆ノ妙ヲ得タリ此コト彼ヨリ委ク聞ケリ」

(24) 『瓊浦雜綴』卷之上、五七九頁「崎尹成瀬因州正定の家にて毎年十二月朔日三杵餅といふを人々に食はしむ、これは大坂各御陣の時先祖式齋君この日出陣をいそぎて、春きかけし餅をそのままに厩の馬にくはしめて、さて自分も食ひ士卒もくひて出陣し給ひしとそ、今も赤飯のやうにてやはらかなるものに豆粉をそへてまづ既にそなへ後に自らも人々もめすなり、一齋君の墓大坂の仏照寺にあり、今年甲子林祭酒に文をこひ清国医胡振兆新にかかしめて、仏照寺にたてらるつといふ、十二月朔日」

(25) 『日本詩話叢書』卷五「五山堂詩話」、二三四頁、鳳出版、東京、一九七二復刊。

(26) 『和漢対照書札』、文政辛巳(一八二二)孟夏新鐫、江戸書林、文会堂、逍遙堂。

(27) 『杏林叢書』上巻解題、四頁、思文閣株式会社、京都、一九二四発行、一九七一覆刻。

(28) 新名規明「大田南畝の長崎」『長崎談叢』第八十四輯、一三六頁、長崎史談会編、長崎、一九九五発行。

(29) 西琴石「長崎古今学芸書画博覧・芸苑叢書」、八頁、図画刊行会、吉川弘文館、東京、一九一九。

(順天堂大学医学部医史学研究室・北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部・中国長春中医学院)